

# 恥をかいた神としての六条御息所

——『源氏物語』の御霊信仰に関する一考察——

The embarrassed God · Rokujo Miyasudokoro

—— A research on the Ghost Faith in the Tale of Genji ——

程 青\*

CHENG Qing

(要旨)

『源氏物語』に登場してくる六条御息所は、物の怪という怪異現象と関わりを持つこともあって、その性格造型は気性の激しい印象を与えるものとなっている。『源氏物語』の中で、光源氏を主人公とする正編の世界では、その六条御息所の物の怪が、死霊としてのみならず、生霊としても現れている。本稿で注目するのは、この六条御息所の生霊化に関わって用いられてくる「恥」という表現である。考察を展開する上で参照するのは、記紀神話に描かれている「恥」である。記紀神話には、恥をかいた神が祟りを為すという型の話が散見する。この型の話を手がかりとして、本稿では六条御息所を“恥をかいた神”と看做し、その生霊化の契機について検討してゆく。

六条御息所の生霊化の背景を探る一視点として、従来の研究では、平安時代に発生した御霊信仰との関わりが指摘されてきた。実際、物語には、六条御息所の怨霊化(生霊化)、その怨霊の祟り、そしてその怨霊に対する鎮魂という、御霊信仰の生成過程を窺わせるプロセスが描かれてもいる。本稿ではこれを踏まえつつ、特に最後の段階となる鎮魂について、再検討を図ることになる。注目するのは、「葵」巻に現われてきた六条御息所の生霊が、光源氏と対面した際に、自ら「魂結び」を要求している点である。これを本稿では封印と解する。続く「賢木」巻において、六条御息所は都を離れて伊勢へ下向する。これは、娘である斎宮に同伴しての下向となる。斎宮は、天皇の代理として伊勢へ赴く、いわば国家最高位の巫女である。本稿では、そういった斎宮の、巫女としての象徴性から窺える機能についても検討を加える。そして、その象徴的機能を、“祟り神としての天照大神の鎮魂と封印”と解せる可能性について論じる。

以上の検討を踏まえ、本稿では、六条御息所の生霊化に限定されるのではなく、伊勢下向をも含む範囲で御霊信仰の生成過程が物語の文脈に構造化されていることを明らかにする。

## 1. 問題提起

『源氏物語』に描かれている女君たちの中で、六条御息所は、怪異を伴って登場し、怪異を伴って退場してゆく。いわば物語の怪異を一身に担っている人物である。六条御息所の怪異を表わすキーワードは、「物の怪」で

ある。六条御息所の「物の怪」は、生霊と死霊の両方で描かれているが、本稿で注目するのは六条御息所の生霊の方である。

ここで従来の研究史を顧みておこう。六条御息所の生霊化の契機については、三苦浩輔氏の「前坊の廃太子事件」に関する論<sup>1</sup>、三谷栄一氏の「故父大臣の御霊」に関する論<sup>2</sup>、

\* 山口大学大学院東アジア研究科 (The Graduate School of East Asian Studies, Yamaguchi University)

小山清文氏の「早良皇太子と桐壺朝との接点」に関する論<sup>3</sup>などで扱われてきた。これらの論によると、六条御息所の生霊化の背景には御霊信仰が認められるという。この御霊信仰とは、政治的に失脚し、死に至った者の無念が怨霊となり、祟りを為すという発想のもとに、その怨霊を祀って封印し、御霊として鎮魂するという、共同体の考え方を言う。したがって先行研究は、六条御息所の生霊化を政治的失脚——即ち、御息所の夫である前坊の廢太子事件——に関与させて解説しているということになる。

ここで注目されるのが、六条御息所の一時的な物語からの退場ともなる「賢木」巻の伊勢下向である。これは、御息所が娘の斎宮に同伴して伊勢へと下向するものであるが、この物語展開に関して、近年、「神」の問題や「巫女性」との関わりを指摘する論が提出されてくるようになった。久富木原玲氏の「天照大神の追放」に関する論<sup>4</sup>、小嶋菜温子氏の「六条御息所と神の罪」に関する論<sup>5</sup>、奥村英司氏の「六条御息所の苦悩」<sup>6</sup>に関する論などである。これらの論により、伊勢下向が神の罪という観点から捉え直されるようになった。

さて、本稿は、六条御息所の生霊化に見られる御霊信仰、及び伊勢下向に示唆された宗教的・信仰的な象徴性を読み込もうとする点においては、これらの先行論と同様の立場である。但し、以下の点で異なるものもなっている。まず、(1) 六条御息所の怨霊化、即ち、「葵」巻における生霊化の契機について、本稿は、前坊の廢太子事件という政治的失脚を想定するのではなく、六条御息所の「恥」が関与していると捉えておきたい。(2) 「恥」という表現に注目し、そこから記紀神話に見える「恥」をかいた神が祟りを為すという型の話を手繰り寄せ、六条御息所をそういった「恥」をかいた祟り神の系譜に連なる後裔と

して捉えていく。次に、(3) 従来の研究では、六条御息所の生霊化の背景に御霊信仰が存在すると指摘されてきたが、その適用は生霊化に限定されていた。本稿では、その適用範囲を六条御息所の伊勢下向の条にまで広げて考えることになる。即ち、伊勢の斎宮にまつわる象徴的機能を踏まえつつ、六条御息所の伊勢下向を怨霊の封印と看做し、御霊信仰の生成過程が物語の文脈に構造化されている様相を具体化していくことになる。

## 2. 御霊信仰と『源氏物語』 — 六条御息所の生霊化の背景

周知のように、御霊信仰の生成は歴史上の御霊会を一つのきっかけとしている。但し、近年提出されてきた御霊信仰の研究によると、この国家祭祀に位置づけられた御霊会の出現は、むしろ、それ以前から祟りをなす「悪霊」などの霊的な存在が社会に認められていて、疫病などの現象を通じて朝廷や民衆を脅かしていたことを示唆するものであると解されている<sup>7</sup>。その一例として、奈良朝に初めて怨霊と看做された人物である長屋王を挙げることができる。さらに遡れば、アニミズムに基づく人格神の崇拝的発動に御霊信仰の原型を見て取る立場もある<sup>8</sup>。これらの諸論によって了解されるのは、御霊会が出現する以前に、既に御霊信仰的な発想が社会に存在していたということである。

ここで、『源氏物語』に視点を移してみよう。物語世界には、霊的現象としての怪異が散見する。六条御息所という登場人物は、これらの怪異の多くに関わっている。試みに、怪異に関わる語として「物の怪」や「生霊」を取り上げ、その用例を調べてみると、「物の怪」の用例は全部で53例あり、内訳は、正体不明31例、六条御息所19例、法師2例、桐壺院1例

となる<sup>9</sup>。それに対し、「生霊」は全部で2例あり、それはいずれも六条御息所を主体とする用例となる。しかし、用例数の多寡は、ここでは問題ではない。わずか2例の「生霊」であっても、それは御息所の物の怪としての形態を見事に具現しているからである。

六条御息所の生霊化に関わって御霊信仰を見て取る先行研究は、概ね、「故父大臣の御霊」という表現を皮切りに論を展開していると言ってよい。葵の上を苦しめる生霊は、御息所の生霊と「故父大臣の御霊」のどちらであろうか、という噂が世間に広まり、御息所はそのような噂を耳にしたことを契機として悩み始め、精神的な不安を抱えるようになっていく。物語は、なぜこの文脈において「故父大臣」の名を持ち出してくるのか。これは、葵の上に取り憑いている祟りを、単なる六条御息所の嫉妬という個人的な問題に収めず、父の六条大臣、乃至は六条一族の怨念という集団的な問題へと展開していく道を拓くものとなる。生霊の背後に作用する六条一族の怨念が、葵の上の出産を阻もうとしているのではないか。こういった推測を糸口とすると、六条御息所の生霊化、及び左大臣家側の受けた祟りの要因は、御息所の父六条大臣、乃至は六条一族の政治的な敗北に求められてくると言える。

小山清文氏によって、歴史上の早良親王の廢太子事件は、『源氏物語』における前坊の廢太子事件と類似しており、「桓武天皇・早良皇太弟と桐壺朝との接点は軽々に看過しがたい」<sup>10</sup>という説が提出された。小山氏の説に導かれつつ、『日本三代実録』の貞観五年五月二十日条に記されている御霊会の記事<sup>11</sup>をここで顧みておくことにしよう。これは、怨霊の祟りを鎮めるために催されたものであり、この御霊会をきっかけに、御霊信仰が確立されることになった。しかも、御霊会で祀

られた六座の御霊は、生前、いずれも政治的な失脚を経験し、怨念を抱いたまま死去した、いわば怨霊である。つまり、政治的な失脚は、御霊生成の主因とも言えるのである。本稿で留意するのは、早良親王が、その祀られた六座の御霊の一人であるという点である。小山氏の論じた通り、歴史上の早良親王の廢太子事件と、『源氏物語』における前坊の廢太子事件との間には、接点が窺える。次代の天皇となる有資格者であるがゆえに、政争に巻き込まれ、その命を絶たれた皇太子。早良親王と前坊とは、そういった類似点で結ばれているため、前坊もまた、御霊とされるのに相応しい存在だと言える。因みに、前坊の廢太子事件があったと想定して、その敗者側に置かれている現存の人物は、六条御息所の他に存在しない。結果として、彼女は過去の政治的失脚から解放されずに、生霊化してしまったのである。六条御息所の生霊化の背後に御霊信仰を見て取る視座とは、以上のようなものとなる。

### 3. 六条御息所をめぐる「恥」の表現構造

ここで、『源氏物語』における「恥」という語の用例を概観しておきたい。物語中、「恥」は全部で384例あるが、同時に二つの人物を指す場合が5例あり、検討対象は合計389例となる<sup>12</sup>。こういった概観のもとに、本稿では、六条御息所の生霊化が描かれている「葵」巻の「恥」に焦点を絞ってみたい。

「葵」巻における「恥」の用例は全部で10例ある。対象人物は、六条御息所が3例、葵の上が2例、紫の上が2例、光源氏が1例、頭中将が1例、左大臣が1例、となる。ここで注目したいのは、六条御息所に関わる3例の「恥」である。因みに、『角川古語大辞典』によると、

名詞としての「恥」の主意は、「面目を失うこと」であるという。また、形容詞としての「恥（はづかし）」は、「自分の落ち度を自覚」する場合の劣等意識と、「相手の属性」から感じられてくる劣等意識の二つに大別されるようである<sup>13</sup>。こういった語義を踏まえつつ、六条御息所を対象人物とする3例の「恥」について見ていきたい。

- ① 人のため恥がましきことなく、いづれをもなだらかにもてなして、女の恨みな負ひそ」とのたまはするにも、けしからぬ心のおほけなさを聞こしめしつけたらむ時と恐ろしければ、かしこまりてまかでたまひぬ。(葵②一八頁)<sup>14</sup>
- ② 女も、似げなき御年のほどを恥づかしう思して心とけたまはぬ気色なれば、それにつつまたるさまにもてなして、院に聞こしめし入れ、世の中の人知らぬなくなりたるを、深くしもあらぬ御心のほどを、いみじう思し嘆きけり。(葵②一九頁)
- ③ 御息所は、心ばせのいと恥づかしく、よしありておはするものを、いかに思しうむじにけん、といとほしくて参でたまへりけれど、齋宮のまだ本の宮におはしませば、榊の憚りにことつけて、心やすくも対面したまはず。(葵②二六頁)

①は、桐壺院の光源氏に対する訓戒である。光源氏と出会う前の御息所は、前坊妃という高い社会的地位にあった。この高い身分が原因で、光源氏と出会った当初、御息所はこの恋愛に消極的であった。が、光源氏の積極的なアプローチによって、御息所は振り向くようになる。こういった経緯があったにもかか

わらず、恋愛成立後の光源氏の態度は一変する。当初は、御息所の社会的な地位の高さや、その地位の高さに見合った彼女の教養が、若い光源氏には高嶺の花として輝いて見えていたのだが、その地位や教養の高さは、一方で彼女のプライドの高さをもたらすものでもあることに、光源氏は気づき始めたのである。そのような誇り高き御息所を、光源氏はいつしか煩わしく感じるようになり、二人の間の気持ちに距離が生じるようになっていったのであった<sup>15</sup>。このような光源氏の態度に対して、父である桐壺院は、彼をきつく諫めていく。その発言内容は、光源氏の行為を、六条御息所の面目を失わせることであると訓戒するもので、そういった条において、「恥がましき」という表現が用いられてくる。即ち、御息所に恥をかかせる行為を、桐壺院は、「恥がましき」と表現していくのである。

②は、六条御息所が自分の年齢に対して「恥」を感じるという条である。自分が二十九歳であるのに対し、恋人の光源氏はまだ二十二歳であり、女である自分の方が七歳年上であるという年齢差に対して、不釣り合いを自覚し、それを「恥づかし」と感じている。御息所の光源氏に対する思いは、当初の消極的なものから、この時点では情熱的なものへと変わっていた。しかも、二人の関係は、世間に周知のものとなっており、それを知らない者は誰もいない状態となっていたのである。そういった状況にもかかわらず、光源氏の情熱はすでに冷めてきており、誇り高き御息所としては、今さらこの恋愛をやめるわけにもいかず、退くに退けない所に追い詰められていた。御息所は、この不如意な恋愛の原因を、光源氏に求めるのではなく、自分に求めていく。そして、年齢の不釣り合いという点にその原因があると捉え、それを自身の劣等感として抱えてゆくのである。ここに見ら

れる「恥」とは、御息所の自己意識としての劣等感の用例として把握されよう。

③は、光源氏が葵の上と御息所の車争いの一件を聞いた際の心内文である。光源氏は、車争いによって御息所が衆人の前で恥をかくことになり、それを気の毒なことと考え、御息所への憐憫の情を示す<sup>16</sup>。御息所の高い身分と教養がもたらす自尊心の高さは、彼女を支えるものであると同時に、それが高じて驕慢の心を生む土壌ともなる<sup>17</sup>。そのような御息所が、葵祭という都の人々の集まる場で、光源氏の正妻である葵の上から侮辱を受け、敗者としての姿を曝してしまったのである。誇り高い御息所は、この時、正妻である葵の上に対し、未だ正式な妻妾として位置づけられていない自分の立場を思い知り、それを自身の劣等感として抱えることになったと推察される。この条に表出する「恥」は、六条御息所を前にした時に感じる他者側（ここでは光源氏となる）の劣等感としての用例であるが、そういった用法としての「恥」が、御息所の屈辱感を一層際立たせるものとして、この文脈では機能し、御息所の造型に関与してきているのである。

以上の3例の「恥」は、桐壺院、六条御息所、光源氏と、それぞれ違う視点から表現されている。①の用例は「恥がまし」という派生語のかたちになるが、「面目を失うこと」であり、②の用例は自分に起因する劣等感、③の用例は相手の属性に起因する劣等感として解することができようか。即ち、物語は、自己意識としての劣等感の用例、あるいは、他者の劣等感を引き出す用例など、様々な語法を通して六条御息所と「恥」という表現とを結び付けているのである。六条御息所の面目を失わせる行為としての「恥」。年齢差を自分の劣等感として「恥」と捉えてしまう六条御息所。これらはいずれも、六条御息所の自尊心が高

いものであったがゆえに、かえって強く羞恥をもたらすものとして作用してしまったと言える。凡人であればさほど気にしないようなことでも、それを「恥」と感じてしまうのが六条御息所であり、それは彼女の誇り高い性格がもたらす不幸とも言える。そして、そのような誇り高さ六条御息所が、衆目の前で恥をかく様を物語は描いてゆく。六条御息所の自尊心や劣等感、屈辱感をかたどるうえで、物語はなぜ、「恥」という表現を重ねてゆくのか。次節では、この「恥」という表現から窺えるイメージの抽出に努めたいと思う。

#### 4. 恥をかいた祟り神

果たして物語は、いかなる論理のもとに、六条御息所と「恥」という表現を結び付けてきているのだろうか。「恥をかく」ということには、いかなる象徴的な意味が込められているのだろうか。ここで参考になるのが、鎌田東二氏による「恥」の神話的考察である。鎌田氏は、記紀神話において「恥」をかく神が登場し、それらの神が祟りをなす点に注目する。そして、それらの祟り神を御霊信仰の構造から捉え直す視点を提供している<sup>18</sup>。因みに、御霊信仰とは、無念の死を遂げた者の怨霊が共同体に災禍をもたらすという発想のもとに、その怨霊を畏怖し、鎮撫するという宗教観のことである。なお、鎌田氏は、記紀神話に見られる「恥」をかいた神として伊邪那美命と大物主神を挙げており、参考になる。本稿でも、以下にそれらの具体相を検証しておきたい。

まずは、『古事記』における伊邪那岐命の黄泉国訪問譚を見ていこう。伊邪那岐命の妻の伊邪那美命は命を落として黄泉国の者となった。その妻を追って、伊邪那岐命は黄泉国を訪れる。訪問してきた伊邪那岐命に対

し、伊邪那美命は「我を視ること莫れ」（四五頁）<sup>19</sup>と警告する。しかし、伊邪那岐命は「視ること莫れ」という禁忌を破り、伊邪那美命の醜く変わり果てた姿を見てしまう。伊邪那美命は「吾に辱を見しめつ」（四七頁）と激怒して、予母都志許売を先鋒に、黄泉軍を挙兵し、伊邪那岐命を追いかけさせる。伊邪那美命は、醜い姿を見られたことで「辱（はぢ）」を感じ、態度を豹変させてゆくのである。屈辱感を感じた伊邪那美命は、伊邪那岐命に「如此為ば、汝が国の人草を、一日に千頭絞り殺さむ」（四九頁）と呪いかけ、祟りを為す。即ちここでは、「醜態を見られる」という「辱」が契機となって祟りが発動しているのである。

次に、『日本書紀』における大物主神の三輪山伝承を見ていきたい。大物主神とは、本来的に祟り神のイメージを持っているが、果たしてその祟り神は、いかなる文脈で「恥」と結びつけられているのか。

是の後に、倭迹迹日百襲姫命、大物主神の妻と為る。然れども、其の神常に昼は見えずして、夜のみ来ます。倭迹迹姫命、夫に語りて曰はく、「君、常に昼は見えたまはねば、分明にその尊顔を視たてまつること得ず。願はくは暫留りたまへ。明旦に仰ぎて美麗しき威儀を覲たてまつらむと欲ふ」といふ。大神対へて曰はく、「言理灼然なり。吾、明旦に汝が櫛笥に入りて居む。願はくは吾が形にな驚きそ」とのたまふ。爰に、倭迹迹姫命、心の裏に密かに異しび、明くるを待ちて櫛笥を見れば、遂に美麗しき小蛇有り。其の長さ太さ衣の紐の如し。即ち驚きて叫啼ぶ。時に大神、恥ぢて忽に人の形に化り、其の妻に謂りて曰く、「汝、忍びずて吾に羞せつ。吾、還りて汝に羞せむ」とのた

まふ。仍りて大虚を踐みて御諸山に登ります。爰に倭迹迹姫命、仰ぎ見て悔いて急居。即ち箸に陰を撞きて薨ります。

（巻第五、崇神天皇十年九月二十七日条）<sup>20</sup>

大物主神は、倭迹迹姫命と結婚した。妻となった倭迹迹姫命は、大物主神に正体を見せてくれと要求する。それに対して大物主神は、「吾、明旦に汝が櫛笥に入りて居む」と言い、「願はくは吾が形にな驚きそ」と警告した。しかし、倭迹迹姫命は、大物主神の警告を破り、櫛笥の中を見てしまう。そこには「美麗しき小蛇」が入っていた。大物主神の正体を見てしまった倭迹迹姫命は、その瞬間、「驚きて叫」ぶ。その様子に、大物主神は、「我に羞をかかせた」と怒り、三輪山に帰って行った。倭迹迹姫命は深く後悔し、箸で自分の陰部を撞いて死んでしまう。本文には、大物主神の正体について、「美麗しき小蛇」と描かれているが、倭迹迹姫命の驚愕した様子と呼び声からすれば、倭迹迹姫命にとってその「小蛇」は、美しい物などではなく、醜悪な物であったに違いない。大物主神の「美麗しき威儀」は、倭迹迹姫命の驚愕によって醜態へと転換してしまったのである。ここで留意すべきは、大物主神が去って行った後に、倭迹迹姫命が自らの命を絶っているという点である。つまり、大物主神が「羞」をかいたことによって、倭迹迹姫命の死がもたらされると解されるのである。あるいは、倭迹迹姫命の死は、大物主神の為した祟りの結果と見做すことができるかもしれない。

以上が、記紀神話に見られる「恥」をかいた神たちの具体相となる。伊邪那美命の逸話も、大物主神の逸話も、共に「醜態を見られた恥」が契機となって屈辱感が生じ、その屈辱感から祟りが発動していくというプロセスを構造化していることが確認される。「恥（辱・

羞)」という表現から導き出される構造とその象徴的な意味を、このように捉えておきたい。ここで再び、『源氏物語』の文脈に戻ってみよう。前述のように、六条御息所の屈辱感「恥」と共に表現されていた。果たして、彼女も記紀神話の神々と同様、醜態を見られるというプロセスを経ることになっているのか。ここで、葵祭における御息所の状況を確認していきたい。

- ・よき女房車多くて、雑々の人なき隙を思ひ定めてみなさし退けさする中に、網代のすこし馴れたるが、下簾のさまなどよしばめるに、いたうひき入りて、ほのかなる袖口、裳の裾、汗衫など、物の色いときよらにて、ことさらにやつれたるけはひしるく見ゆる車二つあり。(葵②二二頁)
- ・斎宮の御母御息所、もの思し乱るる慰めにもやと、忍びて出でたまへるなりけり。つれなしづくれど、おのづから見知りぬ。(葵②二三頁)

ここに引用した本文は、前者が、六条御息所が葵祭へ見物に出かけた条であり、後者は、その見物する場所に車を停めた条である。六条御息所は、行列に加わる光源氏の晴れの姿を一目見たいと渴望し、出かけてきている。一方で、御息所の心には、光源氏との不如意な恋愛が暗い影を落としてもいた。そのため、御息所の心は「もの思し乱るる」のが常態となっていた。御息所は、その物思いを慰めるために、光源氏の姿を見に来たのである。但し、自分と光源氏の不如意な恋愛関係が既に世間に知られていたため、御息所は正々堂々と出かけることはできない。それゆえ御息所は、地味な車に乗り、目立たぬ姿で忍んで出

かけていたのであった。

「さばかりにては、さな言はせそ。大將殿をぞ豪家には思ひきこゆらむ」など言ふを、その御方の人もまじれば、いとほしと見ながら、用意せむもわづらはしければ、知らず顔をつくる。つひに御車ども立てつづけつれば、副車の奥に押しやられてものも見えず。心やましきをばさるものにて、かかるやつれをそれと知られぬるが、いみじうねたきこと限りなし。榻などもみな押し折られて、すずろなる車の筒にうちかければ、またなう人わろく、悔しう何に來つらんと思ふにかひなし。(葵②二三頁)

これは、忍び姿でやってきていた六条御息所の車が、遅れてやってきた葵の上方の家来たちによって場所を移動させられ、更には車を壊され、ついには正体を明かされるという場面である。六条御息所は、忍び姿に車をやつしていたために、周囲には気づかれずにいた。そして、そのような地味な存在であったために、車を移動させられる結果となったのである。その過程で喧嘩が発生し、葵の上方は六条御息所の車を破壊していく。御息所の車は「奥に押しやられ」て、「榻などもみな押し折られて、すずろなる車の筒にうちかけ」られた状態になってしまう。このような崩壊した車の様子は、御息所の姿を象徴したものに他ならない。その姿を、物語は「人わろく」とかたどっており、誇り高き御息所は今、屈辱感と共に公衆（＝「人」）の場で醜態（＝「わろく」）を曝すことになったのである。この時の御息所の心境は、人前で不当な扱いを受け、醜態を曝されたことに対して「悔しう」と、屈辱感を抱いている。

因みにこの場面について、藤田恵子氏は、

御息所の位相を伊勢の神として捉え、その伊勢の神が、この葵祭の主神である賀茂の神によって拒絶されていく物語と読み解いている<sup>21</sup>。祭という神事の場に、神の幻影を見ていく論として捉えられよう。御息所に神の姿を見て取ろうとする点は本稿も同様の立場にある。但し、本稿では、そこに「恥」をかく神の幻影を透かし見ておきたい。即ち、この御息所の醜態こそは、記紀神話に描かれていた“恥をかく神”の醜態として位置づけることができるのではないか。記紀神話の神たちは、醜態を見られたことを「恥」と捉え、それを契機として祟りを発動させていた。この「葵」巻の六条御息所もまた、葵の上方から暴力的な扱いを受け、衆目の前で醜態を曝され、それを屈辱に感じ、やがて生霊と化してゆくのである。そして、御息所の生霊によって葵の上は崇られ、ついには死去する。この一連の展開の契機となったものは、葵の上方によってもたらされた「恥」なのである。六条御息所は、伊邪那美命や大物主神と同様に、「恥」をかく祟り神の系譜に位置付けることが可能であると捉えておきたい。

## 5. 伊勢下向—六条御息所に対する封印

六条御息所の生霊化の背景を探る一視点として、従来の研究では、平安時代に発生した御霊信仰との関わりが指摘されてきた。実際、『源氏物語』には、六条御息所の怨霊化（生霊化）、その怨霊の祟り、そしてその怨霊に対する鎮魂という、御霊信仰の生成過程を窺わせるプロセスが描かれてもいる。

本稿ではこれを踏まえつつ、特に最後の段階となる鎮魂について、再検討を図る。この問題を考える上で、本稿が目にするのは、「葵」巻で六条御息所の物の怪（生霊）が光源氏と

対面した際に、自ら「魂結び」を要求している点である。前節に見てきたように、六条御息所は「恥」という表現に絡み取られるようにして精神面が押し潰され、深い物思いに沈んでいった。その結果、御息所の心は「あくがるる」こととなり、魂は身体から遊離していく。この遊離した魂は物の怪となり、葵の上を苦しめ始める。そのような折、床に臥す葵の上の傍らで、光源氏は不意に、その物の怪と対面することになる。実際に、その場面を確認しておこう。

「何ごともいとかうな思し入れそ。さりともしけしうはおはせじ。いかなりともかならず逢ふ瀬あなれば、対面はありなむ。大臣、宮なども、深き契りある仲は、めぐりても絶えざなれば、あひ見るほどありなむと思せ」と慰めたまふに、「いで、あらずや。身の上のいと苦しきを、しばしやすめたまへと聞こえむとてなむ。かく参り来むともさらに思はぬを、もの思ふ人の魂はげにあくがるるものになむありける」となつかしげに言ひて

なげきわび空に乱るるわが魂を結び  
とどめよしたがひのつま

とのたまふ声、けはひ、その人にもあらず変りたまへり。(葵②三九～四〇頁)

光源氏は、葵の上に対し、夫婦の縁は後の世も続くとして、万が一の別れがあっても嘆くことはないと思慰めていく。ところが葵の上は、そういった光源氏の慰めに応えはせず、苦しいので祈祷の声を緩めるようにと訴えていく。実はこの時、葵の上の身体は六条御息所の物の怪に憑依されていたのであった。続く文脈で、御息所の物の怪は、物思いの結果、魂が遊離してしまったことを吐露し、更には歌を詠む。その歌には、「わが魂を結びとど



めよ」とあって、自らの遊離した魂を封印せよとの訴えがなされているのである。これは、当時の「魂結び」という信仰に基づいた訴えである。魂結びとは、着物の下前の袂を結ぶことで、遊離した魂が身体に戻るという発想で、遊離魂を鎮めるための呪術である<sup>22</sup>。物の怪が、自らこのような呪術を光源氏に要求するのは、遊離した魂を封印することで、自己を救済してもらおうとしていることに他ならず、つまり、ここでの物の怪は、もはや自分の力で魂を制御することができなくなっているのである。しかし、光源氏は、こういった物の怪の要求に応えようとはしない。物の怪に名のりを求め、調伏を試みてゆくのである。

ここで留意しておきたいのは、六条御息所に、葵の上を苦しませている物の怪の正体が自分の生霊であるという認識が、この時点ではまだ無かったという点である。つまり、物の怪の発動は、六条御息所の無意識の領域で起きた現象であったのである。六条御息所の無意識の領域で要求された「魂結び」という封印は、それが六条御息所本人ではなく、物の怪という、彼女の無意識の領域による訴えであったがゆえに、その要求は顧みられず、実行されることはなかったのではないか。こういった無意識の領域で発せられた封印への要求は、しかし、やがて物語によって汲み取られていくこととなる。本稿ではそれを、「賢木」巻に描かれてくる六条御息所の伊勢下向に見出してみたい。

「賢木」巻において、六条御息所の娘である斎宮は、潔斎期間を終え、いよいよ伊勢へと赴く次第となる。この伊勢下向に、母親である六条御息所も同伴することになる。古来、母親が斎宮に同伴して伊勢へ下向した例としては、斎宮規子内親王に母徽子女王が同伴した一例しかないとされている<sup>23</sup>。したがって、

六条御息所の伊勢下向は、極めて異例であると言ってもよい。因みに、伊勢の斎宮にまつわる起源については、『日本書紀』に記された倭姫命託宣事件であるとされている。

三月の丁亥の朔にして丙申に、天照大神を豊斟入姫命より離ちまつり、倭姫命に託けたまふ。爰に倭姫命、大神を鎮め坐ませむ処を求めて、菟田の篠幡に詣り、更に還りて近江国に入り、東美濃を廻り、伊勢国に到る。時に天照大神、倭姫命に誨へて曰はく、「是の神風の伊勢国は、則ち常世の浪の重浪歸するくになり。傍国の可憐国なり。是の国に居らむと欲ふ」とのたまふ。故、大神の教えの随に、其の祠を伊勢国に立て、因りて斎宮を五十鈴川の上に興てたまふ。是を磯宮と謂ふ。則ち天照大神の始めて天より降ります処なり。(巻第六、垂仁天皇二十五年三月十日条)<sup>24</sup>

この条によると、そもそも斎宮とは皇女のことを指すのではなく、天照大神を祀るための宮であったことが分かる。その宮とは、天照大神を「鎮め坐ませむ処」として求められた、いわば鎮魂のための装置であった。この宮は、「常世の浪の重浪歸する」伊勢国に建てられた。常世の国とは、「古代人が、海のむこうのきわめて遠い所にあると考えていた想像上の国。現実の世とはあらゆる点で異なる地と考えた国で、後に、不老不死の理想郷、神仙境とも考えられた国」<sup>25</sup>であるという。倭姫命がなぜ伊勢を選んだかについて、倉西裕子氏は、『日本書紀』における「常世」の用例を分析し、『竹取物語』における車持皇子の蓬莱山に関わる失敗譚に基づいて、「倭姫命が風光明媚な伊勢を選んだ意義は、神宮という常世の国を再現することにあつた」<sup>26</sup>と結

論付けた。本稿では、この「不老不死」に留意しておきたい。勝浦令子氏によると、死と女の産穢意識が中国の道教信仰には存在しており、日本はそれを受容しながら、穢れに対する認識を民間に浸透させていったという<sup>27</sup>。死は穢れの一つである。それに対して、伊勢の国は常世の国である。つまり、「死」に関わることのない不老不死の神域として設定されているのである。

ここで、平安朝の斎宮制度にも目を向けておきたい。『延喜式』によれば、斎王が初めて斎院に入る時、そこを出る時、そして伊勢へ向かう直前と、繰り返し禊が行われることになっている<sup>28</sup>。斎王はまた、卜定されてから三年間、潔斎の生活を送ってもいる。このようにして斎王は、伊勢の神宮に入る前に、すでに穢れのない純潔な存在となっているのである。伊勢の神宮に入った時点から、斎王は正式に都を守護し始める。ところで、斎王はいったいどのような災禍から都を守護しようとしたのか。その答えは、伊勢の神宮の内宮にある。周知の如く、伊勢の神宮は外宮と内宮からなる。外宮で祀られているのは豊受大神、内宮で祀られているのは天照大神である。しかも、斎王の奉祀は、そのほとんどが内宮に鎮座する天照大神に対する祭事である。久富木原玲氏によれば、天照大神は皇祖神として祀られてはいても、実態は、ほとんど追放されている祟り神といってよい立場にあるという<sup>29</sup>。天照大神は、祟り神であり、それゆえに穢れとして都から追放されていく存在でもあるということが分かる。

『延喜式』によれば、斎王の年中行事の中で、五月の晦日「斎王、祓川での禊」、八月の晦日「斎王、尾野湊での禊」、十一月の晦日「斎王、祓川での禊」が、特に重視されていたことが窺える<sup>30</sup>。これらはいずれも、斎王が主催する禊となる。禊とは、身に穢れが付いた時に、

川原などで、水で穢れを落とす、いわゆる穢れを浄化する祭事を言う。斎王が年間に行う三回の禊には、天照大神の祟りを防ぎ、穢れを浄化する機能があると推定できよう。これはまた、斎王の持っている力をも意味してくる。それは、祟り神である天照大神を奉祀し、祀ることによってその穢れを浄化する力である。

さて、以上に見てきたような斎宮の役割を踏まえたうえで、再び『源氏物語』の世界に戻り、六条御息所と娘の斎宮との関係を検討してみたい。前述してきた通り、六条御息所の生霊化には屈辱的な経験が関与しており、その在り方は、伊邪那美命や大国主神が、醜態を見られて屈辱感を抱き、祟りを為すというプロセスに一致するものとしてある。いわば、六条御息所とは、伊邪那美命や大国主神などと同じく祟り神の系譜に連なる存在であると、読み得るのである。祟り神という観点で見れば、天照大神もまた、そこに含まれることになる。伊勢の神宮という場所が、祟り神を封印するための装置としてであると想定した場合、そこに娘の斎宮と一緒に赴く六条御息所の姿とは、倭姫命によって伊勢の国に封印された天照大神の姿を彷彿とさせよう。

物の怪の「魂結び」の歌に端を発するかたちで、六条御息所の無意識の領域に生じた封印への欲求は、その後の伊勢下向という物語展開によって汲み取られていくこととなった。そういった六条御息所の歩んだ道筋を象徴的に解した時、そこには、“恥をかいて祟りを為す神”や、“祟りを為すがゆえに伊勢に封印された神”といった存在が透かし見えてくるのである。

## 結論

平安朝初期に成立した御霊信仰は、平安京

という都市に突然発生したわけではない。居駒永幸氏によれば、『風土記』において、既に、共同体の祟り神が社に祀られ、そういった措置（鎮魂）によって、守り神へと変身していく伝承が成立していたという<sup>31</sup>。このような伝承から、御霊信仰の発生基盤には、共同体の祟り神を祀るという契機があったと想定されるのである。『源氏物語』に至るまで、平安時代の人々の思想の根底には、御霊信仰が深く刻み込まれている。物語の世界の人々は、「葵」巻に頻繁に出現する物の怪の正体を推測していた時に、故六条大臣に対して「御霊」という用語を用いていた。物語の背後に隠されている六条一族には、御霊信仰なる物語が潜在していると、推測できる。故六条大臣は、あくまでも背景的な存在として物語の背後に潜んでいる。物語の舞台に登場してくるのは、その血を受け継ぐ娘の六条御息所である。そして、六条御息所は、故六条大臣の怨念を体現するかのようにして生霊化し、物語を通じて物の怪の代名詞となっていた。

御霊信仰の成立過程における怨霊化。従来の研究は、過去に起きたと想定される前坊の廢太子事件を掘り起し、六条一族の政治的失脚があったという前提に立って、六条御息所の生霊化を読み解いた。これに対して本稿で

は、鎌田東二氏の論<sup>32</sup>に導かれつつ、“恥をかいた神”が祟りを為すという神話的類型に基づいて、六条御息所が、そういった祟り神の系譜に連なる存在として捉えられることを論じてきた。即ち、「恥」という表現に着目し、六条御息所の生霊化の契機を、醜態を見られたことによる屈辱としての「恥」と読み解いた。本稿では、このような「恥」が契機となって、御息所が葵の上に祟りを為したと考える。

御霊信仰の成立過程における鎮魂。鎮魂とは、いわば封印という措置にほかならない。これについて本稿では、物の怪の詠んだ歌に見える「魂結び」という表現に注目し、それを物の怪の封印に対する欲求と見做した。しかし、この封印は、六条御息所の無意識の領域で起きた現象でもあり、その場で実現されることはなかった。しかし物語は、その後の展開において、現実レベルで六条御息所の封印を実現していく。本稿ではそれを、「賢木」巻の伊勢下向に見出した。伊勢の神宮とは、都から追放された祟り神である天照大神を封印する装置としてある。物語において、六条御息所が娘の斎宮に同伴して伊勢に赴くことの象徴的意味とは、彼女が天照大神と同じく、祟り神として封印されることにあると考えておきたい。

## 注

- 1 三苦浩輔「六条御息所の怒りと左右大臣家」（『源氏物語の伝承と創造』おうふう、1995年）
- 2 三谷栄一「源氏物語における民間信仰—御霊信仰を中心として—」（『源氏物語講座・第五巻』有精堂、1971年）
- 3 小山清文「源氏物語における前坊・六条一族の意義—六条御息所の生と死—」（『日本文学』、2014年5月）
- 4 久富木原玲「『源氏物語』とアマテラス—六条御息所・光源氏論に向けて—」（斎藤英喜編『アマテラス神話の変身譜』森話社、1996年）
- 5 小嶋菜温子「女三宮・柏木から六条御息所へ—神の罪そして異化の言説—」（『日本文学』1993年5月）
- 6 奥村英司「苦悩する神・六条御息所論」（『鶴見大学紀要』、1998年3月）
- 7 居駒永幸「『風土記』に見る祟り神信仰」（『国文学解釈と鑑賞・特集＝古代に見る御霊信仰と神仏習合』至文堂、1998年3月）
- 8 村山修一「御霊信仰とは」（『国文学解釈と鑑賞・特集＝古代に見る御霊信仰と神仏習合』、至文堂、1998年3月）
- 9 用例調査は、新編日本古典文学全集『源氏物語』①～⑥（小学館、1994年～1998年）をテキストとして行った。
- 10 小山清文、前掲注3論文。
- 11 黒板勝美編『国史大系日本三代実録』（吉川弘

- 文館、2005年)。原文は「廿日壬午。於神泉院修御靈會。靈座六前設施幾筵。盛陳花果。恭敬薰修。延律師慧達為講師。演說金光明經一部。般若心經六卷。命雅樂寮伶人作樂以。所謂御靈、崇道天皇、伊予親王、藤原夫人、及觀察使、橘逸勢、文室宮田麻呂等是也。近代以來。疫病繁發。死亡甚衆。天下以為。此災。御靈之所生也」である。
- 12 全389例のうち、男性登場人物に関して用いられているのは128例で、内訳は、光源氏37例、薫34例、夕霧14例、柏木12例、頭の中將8例、僧都4例、髭黒3例、右近3例、左大臣2例、小君2例、藏人の少將2例、朱雀院2例、冷泉院2例、惟光1例、衛府の次將1例、冷泉院1例、匂の宮1例、となる。一方、女性登場人物に関して用いられているのは229例で、内訳は、中君29例、浮舟29例、大君26例、玉鬘18例、雲居雁15例、紫の上12例、末摘花11例、女三の宮9例、落葉宮9例、明石君9例、葵の上7例、藤壺女御6例、秋好中宮6例、夕顔5例、空蟬5例、六条御息所4例、中將の君4例、桐壺更衣3例、明石の君3例、朧月夜3例、八の宮3例、弘徽殿女御2例、軒端菘2例、六の君2例、源典侍1例、弘徽殿太后1例、朝顔1例、北の方1例、女二の宮1例、弁の君1例、近江君1例、となる。なお、人物を特定しないかたちの使用例は27例あり、内訳は、一般の人たち3例、博士2例、理想の女2例、女房たち2例、乳母2例、命婦2例、ある女1例、若き娘たち1例、女君たち1例、冷泉院の後妃たち1例、一般の姫様1例、大人たち1例、やってきた人たち1例、学問のない男1例、身分の高い男1例、東宮の御学才1例、侍従1例、上達部1例、親王1例、貴公子たち1例、となる。また、物事を対象とする用例は5例あり、歌2例、芸事1例、紅梅の花1例、滝1例、となる。
  - 13 中村幸彦他編『角川古語大辞典』第四卷（角川書店、1994年）
  - 14 本文の引用は、新編日本古典文学全集『源氏物語』①～⑥（小学館、1994～1998年）により、巻名・冊数・頁数を記した。傍線等は引用者による。以下同様。
  - 15 夕顔巻に、「よそなりし御心まどひのやうに、あながちなることはなきも、いかなることにかと見えたり」（夕顔①一四七頁）とあり、御息所に対する光源氏の執心が冷めてしまったことを語り手が批判している。
  - 16 新編日本古典文学全集、頭注九（葵②二六頁）。
  - 17 岡田大助「『源氏物語』における六条御息所の煩惱と苦しみについて」（『工学院大学研究論叢』、2012年10月）
  - 18 鎌田東二「『記紀神話に見る御霊信仰』（『国文学解釈と鑑賞・特集＝古代に見る御霊信仰と神仏習合』、至文堂、1998年3月）
  - 19 新編日本古典文学全集『古事記』（小学館、2009年）により、頁数を記した。
  - 20 新編日本古典文学全集『日本書紀』①（小学館、1994年）
  - 21 藤田恵子「伊勢の神の女・六条御息所一車争いを中心に一」（『愛知大学国文学』、2001年11月）では、「御息所は伊勢の神に支配されるべき人物である。御息所はこの賀茂祭の日の車争いで、忍びの姿で源氏を見に来た自らの姿を世間にさらすこととなり、我身のみじめさを嘆くこととなった。御息所がこのような目に遭ったのは賀茂の神に拒絶されたということではないか」と指摘されている。
  - 22 『日本国語大辞典』第二版（小学館、2001年）、「魂結び」の項。
  - 23 前掲注14書、頭注一二（賢木②八三頁）。
  - 24 前掲注20書に同じ。
  - 25 前掲注22書、「常世の国」の項。
  - 26 倉西裕子「ヤマトヒメの原像」（後藤祥子編『王朝文学と齋宮・齋院』竹林舎、2009年）
  - 27 勝浦令子「七・八世紀将来中国医学書の道教系産穢認識とその影響—神祇令散齋条古記「生産婦女不見之類」の再検討—」（『東京女子大学史論』59号、2006年）。
  - 28 黒板勝美編『国史大系・延喜式』（吉川弘文館、1961年）、巻第五、神祇五「齋宮」の項。本文は「凡齋内親王定畢。即卜宮城内便所。為初齋院祓禊而入。至于明年七月。齋於此院。更卜城外淨野。造野宮畢。八月上旬。卜定吉日。臨河祓禊。即入野宮。自遷入日。至于明年八月。齋於此宮。九月上旬。卜定吉日。臨河祓禊。參入於伊勢齋宮。」である。
  - 29 前掲4、久富木原論文。
  - 30 前掲注28書に、「右五月。十一月晦日。隨近川頭為禊。凡齋王出自野宮。入太神宮。臨於川頭。在前為禊。凡齋王將入太神宮。八月晦日朝廷大祓料」とある。齋王が太神宮に入る前に、禊を為す行事は、八月晦日であることが分かる。しかし、原文の「川頭」というのは、どの川か、表示されていない。所功氏「伊勢の齋王と神宮の祭祀」（前掲注26書所収）によると、「川頭」は、それぞれ、祓川と尾野湊であるという。
  - 31 前掲注7、居駒論文。
  - 32 前掲注18、鎌田論文。